

| | |
|------------------|--|
| Title | アリストテレスの範疇教説とCategoriae(II) |
| Sub Title | Aristotle's doctrine of categories and the treatise called Categories (II) |
| Author | 牛田, 徳子(Ushida, Noriko) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1984 |
| Jtitle | 哲學 No.79 (1984. 12) ,p.1- 20 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | In this second part of the article. I concern myself with some difficulties in the following texts of the Categories: (1) ch. 2, 1a20-b9-Cat. makes use of "being in subject" as a criterion for the categorial distinction between substances and non-substances, and of "being said of subject" as a criterion for the inter-categorial distinction between individuals and universals, which creates ambiguity in the system of fourfold classification of beings where both criteria are used (cp. Top. A9, 103b29-39 where "being said of subject" is used both categorially for praedicamenta and inter-categorially for praedicabilia). (2) ch. 5, 2tall-b36-Cat. modifies the above "four beings" into primary substances (being neither in nor said of any subject), secondary substances (being said solely of primary substances) and accidents (being solely in primary substances) by restricting the inter-categorial use of "said of subject" in the category of substance, which must deny Top. A9 (103b37-39), SE 22 (178b37-39, 179a8-10), Met. Z13 (1039a1-2, a14-16), B6 (1003a8-9), K2 (1060b20-22), for the reason that the universal "what-is-it" essence, being other than the substantial "what-is-it" essence, expresses any one of the non-substantial attributes (otherwise the Third Man Argument will occur). (3) ch. 5, 3b10-23 Cat. modifies again secondary substances into universals that express such-and-such a substance, which does not correspond to what is described in Met. 414, Top. 46 where differentiae are said to express such-and-such a genus which in its turn expresses "what-is-it" in the definition of whatever belongs to any category. |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000079-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレスの範疇教説と *Categoriae* (II)

牛 田 徳 子*

Aristotle's Doctrine of Categories and the Treatise Called *Categoriae* (II)

Noriko Ushida

In this second part of the article. I concern myself with some difficulties in the following texts of the *Categoriae*:

(1) ch. 2, 1a20-b9—*Cat.* makes use of “being in subject” as a criterion for the *categorial* distinction between substances and non-substances, and of “being said of subject” as a criterion for the *inter-categorial* distinction between individuals and universals, which creates ambiguity in the system of fourfold classification of beings where both criteria are used (cp. *Top.* A9, 103b29-39 where “being said of subject” is used both *categorially* for *praedicamenta* and *inter-categorially* for *praedicabilia*).

(2) ch. 5, 2a11-b36—*Cat.* modifies the above “four beings” into primary substances (being neither in nor said of any subject), secondary substances (being said solely of primary substances) and accidents (being solely in primary substances) by restricting the *inter-categorial* use of “said of subject” in the category of substance, which must deny *Top.* A9 (103b37-39), *SE* 22 (178b37-39, 179a8-10), *Met.* Z13 (1039a1-2, a14-16), B6 (1003a8-9), K2 (1060b20-22), for the reason that the universal “what-is-it” essence, being other than the substantial “what-is-

* 慶應義塾大学言語文化研究所教授 (哲学専攻)

it" essence, expresses any one of the non-substantial attributes (otherwise the Third Man Argument will occur).

(3) ch. 5, 3b10-23—*Cat.* modifies again secondary substances into universals that express *such-and-such* a substance, which does not correspond to what is described in *Met.* 414, *Top.* 46 where *differentiae* are said to express *such-and-such* a *genus* which in its turn expresses "what-is-it" in the definition of whatever belongs to any category.

II *Categoriae* の諸問題

(1) *Cat* 2. 1a20-b9 と *Top* A9. 103b23-39

周知のとうり、*Cat* 2 章 (1a20-b9) に「存在するもの」の四つの分類がある。

- (1) 基体について語られるが、どんな基体のうちにもあらぬもの (e.g. 或る特定の人間について語られる「人間」)
- (2) 基体のうちにあるが、どんな基体についても語られないもの (e.g. 靈魂のうちにある或る特定の読み書き術, 物体のうちにある或る特定の白)
- (3) 基体について語られるし、基体のうちにもありもするもの (e.g. 靈魂のうちにあるし、読み書き術について語られもする「知識」)
- (4) 基体のうちにあることも、基体について語られることもないもの (e.g. 或る特定の人間, 或る特定の馬)

以上の四分類は一見してわかるように、「基体のうちにある・あらぬ」と「基体について語られる・語られない」の四通りの組合わせから生じている。J. L. Ackrill は、これら二種類のキイ・タームは *Cat* 以外では術語として使用されることはないけれども、それらが表わす思想はアリストテレスのほとんどすべての著述のなかで主導的な役割をはたしている、と言う。つまり「基体のうちにある(内属する)」は実体から他の範疇に属するものを区別するために使用され、「基体について語られる(述語づけられる)」は個から類種を区別するために使用される。その結果、得られるも

のは

- (1) 実体範疇における類種
- (2) 非実体範疇における個
- (3) 非実体範疇における類種
- (4) 実体範疇における個

であると述べている。⁽²⁷⁾

Ackrill の分析はただちに次のように言い換えられる。「基体のうちに
ある・あらぬ」基準だけが実体範疇 ((1) と (4)) と非実体範疇 ((2) と (3)) の
区別に役に立っているのに対して、「基体について語られる・語られない」
基準は、実体、非実体を問わずインター・カテゴリーアルに個 ((2) と (4)) と
普遍 ((1) と (3)) を区別している。一方では自存的な実体と依存的な属性の
対比が、他方では個と普遍の対比が、Ackrill が言うように「アリストテ
レスのほとんどすべての著述のなかで主導的な役割をはたしている」とし
ても、その二種類の対比を生み出すために *Cat* が使用する二つの基準は
あきらかに異質のものである。⁽²⁸⁾

ところで、以上の *Cat* の分類から生じた構造ときわめて類似な構造を
示しているのが、*Top* A9. 103 b23-39 の論述である。それはすでに前
稿 I (1) (b) で引用されたから、ここでは両書の類似な構造を下のように⁽²⁹⁾

Cat. 2. 1 a 20 - b 9

Top A9. 103 b 23 - 39

| | | | | | | |
|----|-----|-----|---|------|-----|---------|
| 類種 | | | 類 | | | |
| | (1) | (3) | | 動物 | 色 | 大きさ |
| 個 | (4) | (2) | 種 | 人間 | 白 | ペーキウス |
| | | | | 或る人間 | 或る白 | 或るペーキウス |
| | | | | 実体 | 性質 | 分量 |
| | | | | 実体 | 属性 | |

図示しておこう。

すでに前稿で見たように、*Top* の意図は範疇的な述語 (*praedicamenta*) と命題的な述語 (*praedicabilia*) の関連を示すことにあった。両者がどう関連するかは次のように簡潔に述べられていた。「(i) そのような〔命題述語の〕それぞれは、自ら (e.g. 或る白——筆者、以下同じ) についてそれ自体 (白) が語られる場合も、それについて類 (色) が語られる場合も、何であるかを表現するけれども、(ii) それ自らとは異なるものについて語られる場合は、「何であるか」(実体) を表現せず、「分量」か「性質」か、その他の述語 (範疇) のどれかを表現する」(103b35-39)。あきらかに、範疇述語も、命題述語も「基体について語られる」基準に従っている。言い換えるなら、この基準はカテゴリーアルに使用される場合と、インター・カテゴリーアルに使用される場合がある。そして、インター・カテゴリーアルに任意の基体について語られる命題述語が、カテゴリーアルな基体 (実体) について語られる属性述語——実体述語を除いて——に還元されることをさきの引用文は示している。どんな命題述語も実体述語に還元されえない理由は前稿で見たとうりである (11~12頁)。

以上から、*Cat* においてと、*Top* においてとは基準の使い方に以下のような違いがあることが観察される。

- (a) 個と類種を区別するためには、*Cat* は *Top* と同じようにインター・カテゴリーアルな「基体について語られる」基準を使用する。

実体と属性を区別するためには、*Cat* は「基体のうちにある」基準を使用し、*Top* はカテゴリーアルな「基体について語られる」基準を使用する。

- (b) *Top* は一つの基準を異なるシステム——実体—属性系、個—普遍系——のなかで使用する。

Cat は二つの基準を同じシステムのなかで使用する。実体と属性、個と普遍は交錯して複合的な四項を生む。

それゆえ、*Top* においては一つの基準が使用されるときに曖昧さが生じることがありうるけれども、それが適用される二つの対象領域は曖昧ではない。それに対して、*Cat* の二つの基準は曖昧ではないけれども、それらが適用される対象領域は曖昧であると言える。⁽⁸⁰⁾

Top の基準使用が生み出す最大の曖昧さは二義的な“何であるか”——さきの引用文のなかの(i)インター・カテゴリーな何であるか（定義が表現する普遍本質）と、(ii)カテゴリーな「何であるか」（実体本質）——をめぐるのである。

たとえば、H. Maier が、*Top* の方法は範疇分類を改組して、あらたに第一次的「本質」範疇と第二次的「非本質」範疇を区分したとしながらも、後期のアリストテレスには初期の範疇思想が依然として残っているから、結果として「本質」範疇はただ実体範疇にだけ対応することになる、と述べるのはまさに曖昧さに陥っている。⁽³¹⁾ Maier の範疇改組説を行き過ぎだと批評する Ross が、*Top* では、実体範疇における「第一実体」と「第二実体」の区分に類似して、他の範疇にも第一（個別）と第二（普遍）の下部分類が認められたにすぎない、と述べるのは (*op. cit.* Ixxxvii), さらなる行き過ぎであろう。彼は *Top* の基準が二つの異なるシステムのなかで使用されることを区別しないからである。それに対して Ackrill が、どんな範疇のなかでも個について“何であるか”を問うことができるから、*Top* の方法はすべての範疇のなかに個を導入できるけれども、範疇分類は個別の実体についての異なる問い（述語）の集計であるから、すべての範疇に属する個を消去する、と述べるのは (*op. cit.* p. 80), 正しいと言える。しかし Ackrill もまた、実体範疇を指す表記としての“何であるか”がどんな範疇に属するものにも問われるようになるなら、もはやそれは第一の範疇を指すことができない、と述べる点では (*ibid.* pp. 79-80), 誤っていると言える。なぜなら任意の範疇に属する個について問われる何であるかが実体について問われる「何であるか」と同じでないことは、さきの引用

文が明言しているからである。⁽³²⁾

このように人々は、*Top* が使用する一つの基準がもたらす曖昧さを、それが適用される二つの述語系に持ちこんで、その結果として *Top* と *Cat* に本質的な違いがないように考えがちであるけれども、それはさきに示したような両書のあいだに見て取れる、あきらかな方法の違いを見落しているからである。それでは *Cat* 自身は異なる基準が交錯するシステムをどう処理してゆくのだろうか。

(2) *Cat* 5章における推論

Cat の四項分類は5章において大巾に書き換えられる。その過程を跡づけることは *Cat* がなにを目指していたかを明らかにする。簡便のため「基体のうちにある」特徴をAとし、「基体について語られる」特徴をBとして、*Cat* の推論の経過を辿ってゆくことにする。

(1) まず、かの四項のうち、(4)「AでもBでもないもの」が第一実体（実体範疇における個）として立てられる (2a 11-14)。

(2) つぎに、第一実体に当てはまらない特徴の「Bであるもの」と「Aであるもの」がつぎのように規定される。

「Bであるもの」は、その名もその意義^{ロゴス}も基体について述語づけられるものである (2a 19-21)。つまり一義的述語になるもの（シュノーニューモン）である (cf. 3b 7-8)。

「Aであるもの」の若干のものは、その名 (e. g. 「白^{レウコン}い」) は基体について述語づけられるけれども、その意義^{ロゴス}（白^{レウコン}であること）は述語づけられない (2a 29-34)。これを非本来的に述語になるものと呼ぶことができるだろう。

「Aであるもの」の大部分は、その名もその意義^{ロゴス}も基体について述語づけられることはない (2a 27-29)。

ここで注目すべきことは、非本来的述語は、「白^{レウコン}（い）」のように、その

名の形容詞形と名詞形が同じであるものに限られていることである。そこには語形フーシスを変えることでその名を得ている派生名義的なもの (e. g. 読み書グランマき術→読み書きできる(もの), 勇アンドレイ気→勇氣ある(もの)は含まれない。しかし *Top* においては, この種の述語はインター・カテゴリアルなシステムからカテゴリアルなシステムへ還元されるとき生じるのであった (前稿 10頁および注(18), (19)参照)。あきらかに *Cat* は冒頭1章で言及した「パローニュマ」(1a 12-15) を使って, 内属者の多くを述語に書き換えようとしな。これは同書が述語の成立範囲を *Top* より狭く取ろうとする意図を持っていることを示している。

(3) つぎに (2a 34-35), 第一実体以外のすべてのものは次のいずれかであるとされる。

(i) 「第一実体の B であるもの」

(ii) 「第一実体の A であるもの」

(i) はかの四項の(1)「実体範疇における類種」, すなわち第二実体にあたる。(ii) が(3)「非実体範疇における類種」にあたることは例示がそれを要求している。「色は物体のうちにある。だとすれば, それは或る特定の物体のうちにある。なぜなら個々の物体のどれかのうちになら, それは全体的に物体のうちにもないからである」(2b 1-3)。したがって, 残る一項(2)「非実体範疇における個」は消去される。⁽³³⁾

以上の段階で, *Cat* は二つの基準の使用を極端に狭い領域——A でも B でもないもの, その B であるもの, その A であるもの——に制限することになる。その結果, 「基体について語られる」基準はインター・カテゴリアルな性格を失って, ただ実体範疇における個と類種を区別することに使用される。他方, 非実体範疇における類種 (i. e. 基体について語られるし, 基体のうちにありもするもの) は述語性格を失って, 「基体のうちにある」基準に吸収されることになる。いまや明確に, 本来的述語, すなわち一義的述語は実体の類種, つまり第二実体にかざられることになる。

しかし、このことはすでに *Cat* の冒頭 1 章の「シュノーニユマ」の規定で予示されていたのである。

「同一義物と言われるものは、それらの名が共通で、それらの名に応じた実体の定義が同じなものである。たとえば人間と牛は動物と言われる。すなわちそれらのいずれも共通な名によって動物と呼ばれ、いずれの実体の定義も同じである。なぜなら、人がそれぞれの定義——それぞれの「動物であること」の“何であるか”——を与えるときは同じ定義を与えることになるからである (1a 6-12)⁽⁸⁴⁾。

(4) それゆえ、*Cat* が 5 章で次のような結論に達するのはまったく必然的なことであったろう。

「第一実体のつぎには、他のもののなかで、ただ種と類だけが第二実体と言われるのは当然である。なぜならそれらだけが述語のうちで第一実体を明示するからである。すなわち、人が或る特定の人間の“何であるか”を与えるときには、種か類を与えるならば彼は適切に与えることになる……それに対してその他のいずれかを与えたならば、彼は不適切に与えたことになる。たとえば「白い」とか「走る」とか、それらのたぐいのいずれかを与える場合である」(2b 29-36)。

Cat が実体の類種を第二の実体と名付けたのは、それらだけが実体の定義を与える述語だと考えるからである。そして同書が類種を実体についてのみ語られる述語に限定するのは、それらが表わす本質が実体に帰属されることで、範疇の第一位にある「ウーシア」が統一されると考えるからである。*Cat* にとって実体の個別性格がなによりも実体の実体たる特徴であったが、しかし実体の本質性格が伴わなければ実体として充分にならないことはよく認識されていたと思われる。

以上の過程を経て、*Cat* が得たものはつぎの三種である。

- ① つねに基体である第一実体
- ② つねに実体の述語である第二実体
- ③ つねに実体の内属者である属性

この分類は、*Cat* がそこから出発した「存在するもの」の分類を範疇表に書き変えたものだと言えるだろう。しかしこの“書き換え”は、インタ

一・カテゴリーな「基体について語られる」基準を、ただ実体範疇のうちでだけ使用するよう制限する、という修正によってなされている。しかし、このことこそ、*Top* A9 (107b 37-39), *SE* 22 (178b 37-39, 179 a 8-10), *Met* Z13 (1039a 1-2), B6 (1003a 8-9) が禁じていることなのであった (前稿10~11頁参照)。事態をはっきりさせるために、もう一度 *Top* と比較してみよう。

Top A9 「(或る)人間が話題になっているなら、その話題になっているものは「人間である」とか「動物である」と言う場合、人は何であるかを語り、かつ「^{ウーゼフ}実体」を表明する」(103b 29-31)。

「しかし(このような述語が)自らとは異なるものについて語られる場合は、「何であるか」(実体)を表現せず、「分量」か「性質」か、その他の述語のどれかを表現する」(b37-39)。

Cat 5 「人が或る特定の人間の“何であるか”を与えるときには、種か類を与えるならば、彼は適切に(“何であるか”=何であるかを)与えることになる」(2b 31-33)。

「しかしその他のいずれかを与えたならば、彼は不適切に(“何であるか”=「何であるか」を)与えたことになる。たとえば「白い」とか「走る」とか、それらのたぐいのいずれかを与える場合である」(b34-36)。

あきらかに *Cat* は、*Top* の禁止事項——実体についての普遍定義が表現する何であるかは実体である「何であるか」とは異なる——を理解していない。しかしこの禁止事項を守らなければ、実体概念に関して「第三の人間」背理が生じるのを防ぐことができなくなる (前稿11頁)。「共通に述語となるもののどれとして或るこれ(実体)を表現せず、このような(属性)を表現する。さもなくば多くの難点のうち、とりわけ「第三の人間」が結果してくる」(*Met* Z13. 1039a1-3, cf. *SE* 22. 178b36-179a10)。

さらに、*Met* は次のように述べている。「しかしここから結果することは^{アポリア}難問を生む。すなわち、もし普遍がこのような(属性)を表現し、或るこれ(実体)を表現しないという理由で、どんな実体も普遍で構成されないとするなら……どんな実体にも^{ロゴス}理がないことになる。しかるに実体

にだけ、或いは実体にとりわけ、^{ホロス}定義があると万人が思い、またかつて (Z5. 1031 a11-14, cf. 48. 1017b21-23) そう語られたのである」 (Z13. 1039a14-20, cf. K2. 1060b19-23, B6.1003a5-15). この、*Met* のジレンマの意識に *Cat* は気付いていない。なぜなら、もともと「基体について語られる」基準のカテゴリアルとインター・カテゴリアルな用法の区別をしない *Cat* は、実体に普遍的な何であるかしか認めていないからである。

(3) 第一実体と第二実体

「第一実体」と「第二実体」の呼称は *Cat* にだけ見出される。他の著作のなかでは範疇の第一位のものは「或るこれ」($\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\acute{\iota}$) と「何であるか」($\tau\acute{\iota}\ \epsilon\sigma\tau\iota$, $\tau\acute{o}\ \tau\acute{\iota}\ \eta\nu\ \epsilon\iota\nu\alpha\iota$) という呼称でひんぱんに指示される。⁽³⁶⁾ *Cat* の真作性を疑わず、その制作年代を最初期に位置づける人々は、実体の呼称に相違があっても、またそこに作者の思想発展があるとしても、*Cat* における実体概念と他の著作におけるそれとは実質的に矛盾しないと考えている。それは次のような Ross の解釈によって代表される。

アリストテレスにとって「ウーシア」(実体) とは、ほんらいもっとも真実に、充全にあるところのものを意味していたが、アリストテレスはそれを事物のうちに“もっとも真実にあるところのもの”，つまり内在本質とみなす場合と、どんなもののうちにもあらず、それ自体で存在する“もっとも真実にあるところのもの”，つまり個物とみなす場合がある。前者にあたる“何であるか”は本質述語と付帯性述語の対比を指示し、後者にあたる“或るこれ”は実体(基体)と属性の対比を指示する。この「実体」の両義性はすでに *Cat* に現われており、第一実体は“或るこれ”に対応し、第二実体は“何であるか”に対応する。⁽³⁷⁾

以上のように解釈される「実体」の両義性は他の用語と結びつけられて、次のような二系列の概念枠組に作り上げられてきた。

| | | | | | |
|----|--|--------|------|------|------|
| 実体 | $\left\{ \begin{array}{l} \text{或るこれ} \\ \text{何であるか} \end{array} \right.$ | ——主語—— | 基体—— | 個—— | 第一実体 |
| | | ——述語—— | 本質—— | 普遍—— | 第二実体 |

多くの人々はアリストテレスの実体概念についてなにごとか——肯定的であれ、否定的であれ——語ろうとするとき、つねに多かれ少かれ上のような概念枠組に従って発言してきた。しかし「^{ウーシア}実体」という一つの語にこれほど多くの対概念が担わされていては、誰でも当惑し、混乱するのは不思議とするにあたらない。三世紀にポルフィリウスが『^{エイサゴーゲー}範疇論入門』の冒頭(1. 9-14)で、普遍は実在か観念か、独立に存在するか感覚物に内在するか、と問題を投げかけて、中世期に普遍論争が起こるきつかけを作ったのも、“真実にあるところのもの”がかくも曖昧であるからにほかならない。

それゆえ、人はさきのような“アリストテレスの実体概念”をその複雑怪奇さのゆえに非難しようとするのでなければ、それを存在論的に協和させることで満足しがちである。すでに見たように(注(28)参照)、実体概念に個と普遍の対概念を当てはめることを強く批判する偽作論者 Mansion でさえも、主語と述語の両義性を、実体がその本質と同一であるような個別の実在であることによって克服しようとする。「これらの性格は、もしそれで規定される当のものが論理的要素であったなら、あきらかに互いに撞着するであろう。しかしそれどころか、実体とはなににもまして根元的な実在存在であることを思い起こさねばならない。さらに範疇が表わしているのは、述語が志向するところの存在の様式にほかならない……述語が表明する実在と、命題の主語が指し示す実在が一致するとすれば、それはこの実在が他のものに帰属されず、他のどんなもののうちにも内属しないからである」⁽³⁸⁾。

しかしながら、実体が存在分類の第一のものであるなら、同じ権利によって実体は範疇(述語)分類の第一のものであるはずであろう(前稿20～21頁参照)。アリストテレスの「実体」は第一の範疇の名である以外のなんであろうか。存在論的解決に頼ることは、実体のすべての問題を解消させることにならない。G. R. G. Mure の次の指摘は人々にとって依然とし

て多かれ少かれ説得的に思われよう。

「(1)範疇が存在の完全な分類であるかぎり、実体範疇は、動物、人間などといった実体性格——第二実体——ばかりでなく、それらが述語になるところの個別的な感覚実体をも含むことになる……(2)しかし範疇が普遍述語の分類であるならば、それらが適用されるところの対象の個別の実体は……範疇全体の外にあるはずである。(3)しかし個別の実体が、その本質を定義する実体的述語から切り離されるならば、それはなにものでもなくなる。(4)したがって、その本質のすべて、それを定義するためにそれについて語りうるすべて——その個別性、その唯一の“これ性”を除くすべて——が実体範疇に含まれることになる。(5)しかし、ただ一個の特殊としての個が思考によってでなく、感覚によって把えられるにすぎないとしても、やはり実体は個別的であらざるを得ない⁽³⁹⁾」。

以上の Mure の指摘のなかで、もっとも注目に価するのは、個別の実体が主語の座におかれるならば、それはそれ自体としてなにものでもなくなる——ロック風の“裸の基体”になる (*ibid.* n.3)——だろうということである。⁽⁴⁰⁾ しかしこのことは実体は不可知だという認識論的問題にとどまるものではない。⁽⁴¹⁾ 重要なのは、*Cat* が「最勝義に、第一義的に、とりわけ実体と言われるものは、なんらかの基体について語られることもなく、なんらかの基体のうちにあることもないものである」(5. 2a 11-13) と述べているものが、そのような“裸の基体”になる、ということである。或る特定の人間 *ὁ τῷ ἀνθρώπῳ* から「人間であること」を差し引いたならば、残るのは無名の *x* だけであろう。これを *Cat* が「最勝義に、第一義的に、とりわけ実体である」と揚言したとしても、また注釈者 Ross が「それ自体で存在する“もっとも真実にあるところのもの”」と評価したとしても、人々の眼には誇大妄想としか映らないであろう。近代になって“アリストテレスの実体”が急速に失墜していったのも、「実体」をさきのような概念枠組で把えるかぎりなんら不思議なことではなかろう。偽作論者 Jaeger

が、たとえその発展史論的観点からにせよ、*Cat* の唯名論的性格を嫌ったのは理由のないことではない。⁽⁴²⁾

(4) *Cat* 5. 3b10-23

「どんな実体も或るこれを表現するように思われる。第一実体に関しては、それが或るこれを表現するのは議論の余地なく、真実なことである。なぜならそれによって明示されるものは不可分にして、数のうえで一つなものである。しかし第二実体に関して言えば、人が「人間」とか「動物」を発言するとき、それは呼び名の形態から、同様に或るこれを表現するかにみえる。しかしこれは真実でない。それはむしろしかじかのようなを表現する。なぜなら（それが述語づけられるところの）基体は第一実体のような一つなものでないからであって、「人間」や「動物」は多くのものについて語られるのである。ただしそれは、「白い」のように端的に或るしかじかのようなを表現するわけではない。なぜなら「白い」は性質以外のなにもものも表現しないのに対して、種や類は実体をめぐって（その）しかじかのような（質）を（他から）区別するからである。つまりそれは或るしかじかのような実体を表現する。そして人は種をもってするより類をもってする方がいっそう広い範囲で事物を限定する。なぜなら「動物」を語る人は、「人間」を語る人よりいっそう広く事物を包括するからである」

Cat はかの三分類——第一実体、第二実体、属性——を得た（項(2)参照）のちに、以上のように突如としてふたたび個と普遍の問題に戻り、第一実体と第二実体の関係を修正する。

真作論者 L. M. De Rijk は、ここで第一実体を或るこれと対応させ、第二実体をしかじかようなと対応させる *Cat* と、普遍が実体であることを否定する *Met* とのあいだになんら越え難い溝がないことは、かの *Met* Z13. 1039a1「共通に述語となるもののどれとして或るこれを表現せず、これこれのようなを表現する」の一節（項(2)参照）によって立証される、と述べ、それゆえ *Met* の普遍論は *Cat* の第二実体論の論理的展開であると主張している（art. cit. pp. 142-3）。しかしここで本当に *Cat* は、実体の「何であるか」を表現しえない普遍のインター・カテゴリーな性格に気付いたのだろうか。

Cat のテキストを注意深く読んでみるなら、それが理解し難く曖昧であるのに気付かされる。同書は、類種が或るこれを表現せず、或るしかじかのようなを表現することを説明して、それらが実体をめぐってそのしかじかのような質を他から区別する——或るしかじかのような実体(*ποιά τις οὐσία*)を表現することなのである、と述べている (3b19-21)。しかしながら、このような表現は他のテキストのなかには見当たらないのである。

「性質」を概説している *Met* 414を見てみよう。「しかじかようなと言われるのは、或る意味では本質の種差である。たとえば、人間が或るしかじかのような動物 (*ποιόν τι ζῷον*) であるのは、それが二本足の (動物) であるからであり、馬がそうであるのは、四本足の (動物) であるからであり、円が或るしかじかのような図形 (*ποιόν τι σχῆμα*) であるのは、それが角のない (図形) であるからである。なぜなら種差は本質のうえでの質 (*κατὰ τὴν οὐσίαν ποιότης*) だからである」(1020a33-b1)。また *Top* 42 (122b16-17) でも「種差は何であるかを表現せず、むしろ或るしかじかのようなを表現する」と述べられている。アリストテレスがこれらの箇所では「しかじかような」と言うのは定義の要素である種差のことである。定義の残る要素は類である。それは「種のうえで差を持つ多くのものについて何であるか (定義) のうちで述語になるものである」(*Top* A5. 102a31-32, cf. Z5. 142b27-28)。「何であるか (定義) を与える点では種差を語るよりは類を語る方がもっと妥当である。なぜなら人間を「動物である」と語る人は、「歩行的である」と語る人よりいっそう「人間は何であるか」を明示するからである。そして種差はつねに類の質 (*ποιότης τοῦ γένους*) を表現している……」(*ibid.* 46. 128a 23-27)。したがって、本質、何であるかを端的に表現しているのは類である。そして、それに加えてどのような (何であるか) を表現するのが種差であると言える。

以上から *Cat* と他の著作の用語法を比較すると次のようになる。

| | |
|-----------------|---------------------------------------|
| | ど・の・よ・う・な・ ^{ウーシア} ・実・体・か |
| <i>Cat</i> | |
| | 類 種 x |
| | ど・の・よ・う・な・ ^{ウーシア} ・何 (本 質) か |
| <i>Met, Top</i> | |
| | 種 差 類 |

「ど・の・よ・う・な・^{ウーシア}か」という表現は共通であっても、それに相対するものは明らかに同じでない。

それでは、かの *Met* Z13の一節 (1039a1) はどういうことを主張していたのだろうか。「普遍は或るこれを表現せず、これこれよ・う・な・を表現する」と述べるとき、それは、普遍述語が実体である「何であるか」(実体本質)を表現せず、属性を表現するにすぎない、と主張していたのであった。この主張は *Top* に現われている、インター・カテゴリーな何であるかを表現する普遍的な本質述語の或るものが、実体の定義を与えること (A9. 103b29-31, 項(2)参照) を妨げてはいない。それはただ、範疇のレベルでは普遍述語が属性的な範疇のどれかに還元される、と言っているのである。

そこで、*Met, Top* が言うところの定義的な「ど・の・よ・う・な (=種差) ・何であるか (=類)」はそれ自体が、範疇のレベルでは白さのような性質並みの扱いを受けることになる。普遍定義は或る個の集合 (種) を他の集合から区別する質 (特徴) を表わしていても、或る実体を他の実体から区別する本質を表わしていないのである。

それに対して *Cat* は、類種は個 (「不可分にして数のうえで一つなもの」という意味での“或るこれ”) を表わさないけれども、白い性質とは異なり、或る (集団の) 実体を他の (集団の) 実体から区別する質を表わす、と主張している。しかし、いったいど・の・よ・う・な (質の) 実体が他の実体から区別されるというのであろうか。 *Cat* は普遍実体否定論の内実をまった

く理解していなかったとしか思われぬ。同書はただ言葉尻をあわせるために、「第一実体」と「第二実体」のセットを、名詞形の「或るこれ」と形容詞形の「これこれのような」のセットに当てはめて、「しかじかのような実体」と表わしたのかもしれない。しかしその結果、「実体」はしかじかのような x を意味する空虚な言葉になってしまったのである。

項(1)で見たように、*Cat* は *Top* と類似した図式に従って「存在するもの」の分類から出発した。そして、*Top*, *SE*, *Met* が禁止しているにもかかわらず、インター・カテゴリーな性格の普遍を第一実体についてのみ語られる本質述語に制限することで、それを第二実体と名付け、主語である第一義的な個別的実体^{ワース}に、述語である第二義的な普遍的^{ワース}本質を帰属させることで、第一の範疇の統一をはかった(項(2))。そのかぎり同書は *Top* の主題と異なり、実体と属性の区別を意図する範疇論的主题を持っていたのである。しかし同書はここでふたたび個と普遍の問題に戻って、第二実体から「第一実体を明示する」(2b 30-31) 資格を取り外し、多数個の大なり小なりの集合を指し、それらに特有な属性を表わすただの類種に引き戻す。その結果、実体(第一実体)は、さまざまな普遍的属性の大小の枠組のなかで、その都度あれ・これと指示され、特定化されることによって具体的な姿を現わすほかない、無名、無規定の個であることになる。さきの *Mure* の指摘どおり(項(3)参照)第一実体が第一の範疇から外されるばかりでなく、さらに第二実体が明示するはずであった“本質”もまた第一の範疇の座から消え失せることになる。*Cat* が初めになににもまして確立しようとし、ここでなによりもさきに破壊することになった“実体”とはいったいなんであったのか、人が不可解に思ったとしても無理からぬところであろう。⁽⁴⁸⁾

む す び

私は以上の程度でもって *Cat* の検討を終えることにしたい。細部にわた

って見出される *Top* と *Cat* の不一致点は、「*Categoriae* と *Topica* の比較研究——*Cat.* 1a1~3b23をめぐって——」（慶應義塾大学言語文化研究所紀要第14号，1982 所収）でかなりの程度探索しておいた。また，関係概念に関する *Cat* の記述の不整合さは，「アリストテレスにおける関係概念」（同紀要第16号，1984 所収）のなかで示した。しかし，なによりもアリストテレス哲学にとって，また哲学とその歴史における営みにとって重大な問題は実体概念をめぐりものである。私は本稿でもって *Cat* の実体論が奇異なばかりに真作における範疇思想から隔たっているのを示したつもりである。そればかりではない。*Cat* の「実体」は自己矛盾に満ちた観念である。つねに細心の注意をもって自己点検を怠らない，*Top*，*SE*，*Anal.*，*Met* の作者がたとえ若年の時期であっても自己破綻をきたすほどの実体概念——それは必然的に彼の哲学全体に対して破壊的である——を形成したとは思われない。たしかに私の *Cat* 偽作論は，一人の哲学者が生涯を通じて自己の思想に不整合な考えを持たない，という仮設を前提にしていると思われよう。しかし，私が前提しているのは，アリストテレスは生涯を通じて探求しつづけた真理に反することをかつて述べたと思ったのなら，それをどこかで，なんらかのかたちで告白しないほど不誠実な人ではなかった，という信条なのである。（完）

注

- (27) *Aristotle's Categories and De Interpretatione* (1963) 1966, p. 74. 類似のことは D. Ross (*op. cit.* lxxxvii, n.4) によっても指摘されている。
- (28) この事態はすでに偽作論者 S. Mansion によって指摘されている。「この（基体について語られない）特徴はもはや実体性格を表わさず，第一実体の個別性格を表わすのに役立てられる。ここ（*Cat*）では，「基体について語られる」のは普遍であり，「基体について語られない」のは個である……「基体について語られない」ことがその形而上学的意味をまったく剝奪された結果，それは属性にも——それが個別化されるならば——ひとしく適用される」（La première doctrine de la substance, pp. 366-7）。Mansion は「基体につ

- いて語られる・語られない」ことがアリストテレスの範疇分類の基準であることを主張している。
- (29) 「アリストテレスの範疇教説と *Categoriae*(I)」『哲学』第78集, 1984.
- (30) Mansion は、「基体について語られる」基準が真作において論理的領域と存在論的領域にひとしく使用される事実に注目して, *Cat* の作者が混同を避けるためにアリストテレスの語彙を修正した, という推定を立てる (*La première doctrine de la substance*, p. 368). この着想は非凡だと思われるけれども, しかし, アリストテレスが基準の二義性をおそらく十分に意識していなかったことから *Cat* の作者の試みが理解される, と Mansion が述べるのは (*ibid.* p. 369), 重大な誤りであろう. *Cat* の作者は基準の表現の曖昧さを修正しても, それが異なる領域において使用されるという二義性を理解していなかったと言うべきである.
- (31) *Die Syllogistik des Aristoteles*, 1900, II. 2, SS. 321-2. Maier の範疇改組説に類似した説を取るのは W.-M. Kneal (*The Development of Logic*, 1962, p. 26) である. それによると, *Top* に現われているのは「広義の範疇論」であって, それは任意の(狭義の)範疇に属するものについての「本質的」述定と, 範疇を異にする任意のものについての「非本質的」述定の区分である. しかしそれでは範疇の「広義」と「狭義」の意味が曖昧にすぎるばかりか, *Top* の方法が範疇を前提しているという事実が失われる.
- (32) 私の知るかぎり, 人は *Top* に現われる“何であるか”の二義性を区別していない. Waitz, *Aristotelis Organon Graece* ii, 1846, p. 447; Mansion, *Note sur la doctrine des catégories*, pp. 198-9.
- (33) *Cat* のテキストに従うなら「非実体範疇における個と普遍」はこのように解釈せざるをえない. しかし, 「第一実体のBであるもの」以外のすべてが「第一実体のAであるもの」に還元されるのであれば, 非実体的なものは, 個であれ普遍であれ, 「第一実体のAであるもの」であって差支えないはずであろう. たとえば, もし「色(類)が或る特定の物体のうちにある」ならば, 白(種)も或る特定の白(個)も或る特定の物体のうちにあつて差支えなからう.
- (34) *Top* ではシュノーニユマはもっと範囲が広く, 定義, 類のみならず, 特性が表わすものも含まれる (上掲論文「*Categoriae* と *Topica* の比較研究」pp. 202-4参照).
- (35) Cf. 3b10-13 「第一実体が或るこれ $\tau\acute{o}\delta\epsilon\ \tau\tau$ を表わすことは異論の余地く, 真実なことである. なぜなら第一実体によって示されるものは不可分にして, 数のうえで一つなものだからである」. 以上のように, *Cat* に従って

「或るこれ」を個と同一視するのが通説になっているけれども、「或るこれ」が「何であるか」とともにほんらい実体範疇を指す呼称であることを心得ておくことがアリストテレスの実体概念を理解するうえでなによりも重要なことである。項(3)参照。

- (36) 拙論 TOΛΕΤΙ と ΤΙ ΕΣΤΙ—アリストテレスの実体概念をめぐる—」(慶應義塾大学言語文化研究所紀要第10号, 1978) 参照。
- (37) *Aristotle's Metaphysics* II (1924), 1953, pp. 159-160.
- (38) *Le jugement d'existence d'après Aristote*, p. 228.
- (39) *Aristotle*, 1932, p. 185.
- (40) この議論は非アリストテリアンとは言えない。たとえば、パルメニデスの「存在」を一元論的に解釈するアリストテレスの議論のなかに同じ警告が見られる。「(パルメニデスの)「存在」を容認するさいには、それがなにについての述語になろうと、つねにただ一つの意味を持つことだけではなく、それが「まさに存在であるところのもの」「まさに一であるところのもの」であることを容認する必要がある。なぜなら、(もしそうでないと)なんらかの基体について語られる(述語である)のが付帯性であるからには、もし「存在」が或るものに(述語として)付帯するなら、その或るもの(主語)は存在ではなくなるからである。なぜならそれは「存在」とは異なるものだからである」(*Physica* A3. 186a32-b1, cf. *Apo* A4. 73b5-10)。
- (41) 実体が或る意味で不可知であることはアリストテレス自身も認めている。前稿12頁参照。
- (42) *Aristotle, Fundamentals of the History of his Development* (英訳), 1934, p. 46, n. 3.
- (43) しかし事実はその反して、*Cat* の“実体と属性”のセットは歴史を生き続ける。すでに“実体”は、さまざまな“属性”を担うにもかかわらず、それらによって述語づけられなければ逆にそれ自体でなくなるような、パラドシカルな“基体”になり下っている。とはいえ、それは属性を支える不変不易な質料として執拗に生き長らえる。A. N. Whitehead は、そのような“実体と属性の相関的範疇”が近世のデカルト、ロック、ニュートンなどの思想のうちに潜在するのを一つの「不当な具象把握の誤謬」と弾劾し(*Science and the Modern World*, (1926) 1946, pp. 66-9), 藤沢令夫教授は、その淵源がアリストテレスの「実体と属性のカテゴリー」にまで溯れると指摘する(『ギリシア哲学と現代』1980, pp. 82-7, 『イデアと世界』1980, 第I部第二章「形而上学の存在理由」pp. 43-5)。近代的な批判精神にとって“実

アリストテレスの範疇教説と *Categoriae* (II)

「体」が一つのスキャンダラスな言葉であることはもはや贅言を要しないだろう (ラッセル〔西洋哲学史〕(1946) 1, 市井沢, 1970, pp. 203-6参照).